

# 国境を越える社会運動と直接民主主義

——2008年洞爺湖サミット抗議行動における  
「持たざる者の運動」からの考察——

稲 葉 奈々子 (茨城大学人文学部)

## 要約

1999年シアトルのWTO閣僚会議に対する抗議デモを幕開けとするグローバリズム運動は、10年を経過するなかで、運動内部における「南北問題」やエリート主義の問題が指摘されるようになってきた。本稿は、これらの問題の現れ方とそれへのリアクションを、洞爺湖サミットに対する抗議行動を事例として検討する。野宿者や失業者など「持たざる者」の運動は、運動資源を欠くがゆえに、反グローバリズム運動のなかでも排除されてしまう。それへの異議申し立てとして、当事者を担い手とし、直接民主主義を追求することで対応しようとしている。

キーワード：グローバリゼーション, 社会運動, 貧困, 社会的排除

## 1. 社会運動の銀河系

1999年、シアトルで開催されたWTO閣僚会議に反対して5万人の市民が集まり、会議は合意にいたらず、成果なく閉会となったことは記憶に新しい。それ以降、世界全体にかかわることを、ごく一部の「先進国」が決定し、そこに市民が介入する回路がないことに異議を申し立て、サミットなど国際会議の場に10万人を越える市民が集まるようになった。世界経済フォーラムに対抗して企画された「世界社会フォーラム」は、市民の側から「もうひとつの世界」を提案することを目的として2001年以降、ポルトアレグレなど「南」の国の一都市で毎年開催され<sup>(1)</sup>、近年では10万人以上が参加している。

フランスの失業者運動(AC!)や住宅への権利運動(DAL)など貧困を経験する当事者を担い手として、1990年代以降活性化してきた社会的排除に反対する運動団体もこれらのうねりのなかにあった。2003年の世界社会フォーラムでは、「北」の国主導の国際会議だけではなく、「もうひとつ

の世界」を求める社会運動のなかにも、貧困の当事者の視点が欠けていることが、DALやAC!によって問題にされ、国境を越えた持たざる者のネットワーク形成がよびかけられた。こうして声なき者のネットワークNoVoxが誕生した。

AC!の創設者のひとりクリストフ・アギトンがPARC(アジア太平洋資料センター)の招きで1999年来日したことから、日本の野宿者運動も「もうひとつの世界」を求める運動を、国境を越えた運動と連携しながら展開してきた。具体的には山谷争議団に代表される日雇い労働者組合、渋谷・野宿者の生活と居住権をかちとる自由連合(のじれん)、釜ヶ崎を中心として大阪の野宿者支援をする若者が担い手の釜ヶ崎パトロールの会が日本でのネットワーク化の中心になっている。

2003年には日本でもNoVoxと連帯して「持たざる者」の国際連帯行動実行委員会が立ち上げられた。現在では、NoVoxはフランス、ポルトガル、カナダ、ベルギー、ブラジル、ケニア、マリ、ブルキナファソ、トーゴ、日本にネットワークが広がっている。「もうひとつの世界」を言説の上

だけではなく、「いま・ここでの」直接行動で公共空間の占拠によって実現してきた。大阪うつぼ公園や長居公園で野宿者の排除があった2006年、2007年には、フランスやブラジルで、住宅への権利を求める運動団体がサンパウロの日本領事館前、パリの日本政府観光局や大阪市のパリ代表部、世界陸連パリ事務所を占拠するなどして抗議行動を行った。東京でもブラジルのクリチバからの都市開発にともなう住民強制排除に抗議するブラジル大使館前行動、パリの銀行通りを占拠した300家族を支援して排除に反対する東京と大阪でのフランス大使館・領事館前での抗議行動が、野宿者当事者と支援者運動によって行われるなど、直接行動が運動の技法として共有されている。

2008年の洞爺湖サミットに抗議運動には、日本の「持たざる者」の運動の担い手とともにフランスから3人のNoVoxメンバーが参加した<sup>(2)</sup>。以下はその記録である<sup>(3)</sup>。1990年代以降の「持たざる者」の運動は、反グローバリズム運動の「銀河系」を構成する「持たざる者系」運動のひとつである。これらの運動は、構成員の多様性を「団結」の名のもとに消し去らないこと、少数者を排除する代表民主主義ではなく、直接民主主義によるコンセンサス方式をとる運動団体が多いなどの共通点を持つ<sup>(4)</sup>。

本稿で考察する「持たざる者」の運動を構成する団体は、洞爺湖サミットに対する抗議行動のなかで、「G8を問う連絡会」のなかの貧困・労働ワーキング・グループ<sup>(5)</sup>（以下WG）を主催しているように、そもそも野宿労働者、非正規雇用労働者や非正規滞在移民などマイノリティが担い手であり、社会において少数者の声が顧みられない問題はつねに提起されてきた。これは社会全般のみならず、運動内部の決定においても同様である<sup>(6)</sup>。以下では、「持たざる者」の運動におけるマイノリティ当事者の声への関心が、サミット抗議行動のなかでどのように現れているかをみていきたい。

最初に紹介するNoVoxのメンバーのプロフィールから明らかのように、彼らもまた、路上生活や

貧困、非正規雇用を経験しているが、貧困の困難のただなかにいる「当事者」というわけではない<sup>(7)</sup>。しかしNoVoxはローカルな貧困の当事者運動を支援する一方で、当事者内で閉じたものにならずに、ミドルクラスも「当事者」としてかかわるような問題として貧困問題を提起する運動でもある。本稿が運動の特徴として焦点をあてる直接民主主義も、ミドルクラスがみずからの問題として、社会の仕組みの変更に取り組む手がかりを探るものである。

## 2. 貧困・労働ワーキング・グループへの外国からの参加者（NoVoxの構成メンバー）

### DAL（住宅への権利）

1990年に創設され、フランスの劣悪な住環境にある者を担い手とする運動が「住宅への権利運動（DAL）」である。公的機関が所有する空きビルを占拠して、住宅への権利を求める当事者運動として活動している。住宅という、生きるために誰もが必要とするものを、市場経済に委ね、商品化し、投機の対象とすることに反対しており、フランスの新自由主義に反対する運動の主要な担い手となっている。来日したリュド（1982年生）は、DALの専従である<sup>(8)</sup>。大学院生だが、運動が本業になりつつあり、学業はほとんど挫折しかかっており、人生これでいいのか不安をかんじてはいる。これまでの仕事歴はおもにワイン用のぶどう収穫をはじめとする農業の季節労働。2007年の夏は、デンマークでイチゴ収穫の季節労働をしてキャンピング・カー生活、低賃金重労働ですっかり懲りたという。故郷ブルターニュ地方のレンヌからパリにでてきて、DALの活動家のいとこの家に居候していたが、そのいとこが家賃を滞納したまま姿を消してしまい收拾がつかなくなり、DALが占拠して事務所を置いている銀行通りの5階に住んでいる。

### AC!（失業に反対して連帯行動!）

ジェラルール（1952年生）。AC!は1992年創設、

失業のない社会と、就労の有無にかかわらず、すべての人への生活保障を求める運動。1997年には失業と社会的に不安定な地位をつくりだすアムステルダム条約に反対するヨーロッパ行進の主要な担い手となった。職安占拠、スーパーマーケット（不安定就労の温床）占拠、勝手に働いてしまう雇用占拠、ただのり取行の公共交通占拠など、数々の公共空間占拠を実施している。ジェラル自身は、IT関連の会社で断続的に働いたことがあるが、失業状態のほうが長い。路上生活も経験している。ATTAC<sup>(9)</sup>のAC!代表の運営委員。南仏ニース在住。

### NoVox フランス事務局

ブノワ（1969年生）は、マルセイユに本拠地を置く協同組合型出版社 Agone で半専従（専従は給料1,000ユーロ。半専従は給料不定）。ブリュッセルで再開発に反対する運動で活動していたが、ついに住んでいたスクオッターが取り壊しとなり、今は友達の家を転々として生活。出版社で仕事をしていないときには、芸術活動や、NoVox ネットワークの運営に取り組んでいる。NoVox のホームページ担当。故郷は北フランスのダンケルク。現場からの当事者の視点に徹底した運動論で NoVox にかかわっている。

### 3. 6月28日 到着（反グローバリズム運動とエリート問題）

NoVox の3人を迎えに成田へ。空港まで出迎えるに行く必要はないと思っていたが、サミット前の過剰警備で入国にさいして取調べが数時間にわたって行われ、受け入れ先と連絡がとれないと入国拒否される可能性もあるということで、迎えに行くことになった。

最低でも2時間は取り調べられるということなので、飛行機は10時到着予定だが、1時間はでてこないことを見込んで、11時に空港へ。着いたところでスーザン・ジョージを見かける。迎えが誰もいないようだったので、声をかけて ATTAC ジャ

パンのメンバーに電話をかけたりしているうちに、NoVox のメンバーもゲートに姿を現した。スーザン・ジョージは4時間取り調べられたというので、NoVox も当分でてこないと思ったが、「30秒で入国できた。G8 抗議行動に来たと申し出たのに。え、スーザン・ジョージが4時間取り調べ？俺たちはなんで30秒なのだ。これはこれで侮辱的な扱いだ」とブノワは憤慨した様子。スーザン・ジョージのどこに4時間も取り調べなければいけない思想があるんだ、とブノワがぶつぶつ言い続けていると、DAL のリュドは「それ誰？」と尋ねてくる。フランスで反グローバリズム運動にかかわっていてスーザン・ジョージを知らないはずはないので、冗談だと思って誰も相手にしなかったが、どうやら本当に知らない様子であった。あとになっても「で、そのスーザンはようするに何をやった人なのよ」と聞き続けていた。

貧困・労働 WG の分科会に向かう。遅刻して到着した上に、発言者のジェラルが喫煙のため階下にて戻ってこない。発言内容は世界人権宣言を引きながら、誰でも生存する権利はもちろん、食糧や、文化、教育にアクセスする権利が保障されている、という趣旨で、話自体は絵に描いた餅のようだった。しかし要するに仕事をしていなくても、おいしいものを食べて、ビールを飲んで、旅行もして、本も読んで、映画も観ることができるような生活が誰にでも保障されるべきということは国際基準としてすでに確立しているのだから、政府はそれを実現せよ、という意味だから、AC! の主張そのものである。

全体会では、スーザン・ジョージがデモ参加者の暴力を抑制する発言。一枚でもガラスが割れば、メディアはそれだけを誇張して、デモ全体が暴力的であるようなイメージを与えてしまう、だから暴力のないデモにしないでほしいという主張で、ジェノバ・サミット以来の彼女のライトモチーフである。ブノワはスーザン・ジョージのこの発言は、彼女の政治的な主義主張に基づいているわけではなく、単なる階級的限界の問題だと批判する。実際にデモで暴力が起きる現場に居

合わせたことが一度もないのだ、と。だからデモの最中の暴力に歪曲したイメージを持っているが、ひとたびその場に居合わせれば、それが警察の暴力へのリアクションであることのほうが多く、デモ参加者を糾弾することが、いかに間違いであるかがわかるはずだ、と。インテリ同士でしか話をしていないから、暴力が起きるリアリティがぜんぜんわかっていないのだ。三ツ星ホテルに泊まって、インテリだけと話をして何が分かるというのだ、と。世界中どこにいても、ミドルクラスにしか会わずに、パソコンに入っている同じ原稿をいつも一方的に繰り返し読んでいて、現場の運動の当事者の話をきかずに、何が分かるというのだ、と、ブノワ。ジェラルールはスーザン・ジョージが国家の暴力を問題にしないことは問題だが、それ以外は支持しており、リュドはそもそも「で、スーザンって誰よ」という感じで相手にしていない。「スーザンの話をきくために500人来たとして、問題はそのなかの何人が運動に実際にコミットするかでしょう。話を聞いて終わりでは意味ないからね。」

集会後、山谷の1泊3,000円のホテルへ。彼らは、自分たちのホテルを、スーザン・ジョルジュ・サンク・ホテルと命名<sup>(10)</sup>。近くの赤ちょうちんでビールを飲んだ。日本の持たざる者の運動の概要を話しているうちに、山谷争議団の活動家Aさんが合流。被差別部落について質問を受けるが、それへの回答がAさんの社会認識論に発展し、3人が被差別部落の歴史についてほとんど何も理解しないうちに閉店となり解散した。

#### 4. 6月29日 東京（デモと表現の自由の規制問題）

朝、山谷労働者福祉会館へ。東京の野宿者をめぐる状況についてAさんから説明を受ける。午後、東京行動の2日目のデモへ。遅刻して到着したために、発言はデモ終了後となる。警察に歩き方の速度まで完全に統制されたデモに3人とも啞然としていた。フランスのデモは、届け出をだせ

ば道路をすべてつかうことができ、隊列をつくることもなく、だらだらと歩くので、その極北にある日本のデモに驚くのは当然の成り行きであった。

幅が広すぎるNoVoxの横断幕が、規制された3メートルから1センチでもはみ出ることが許容されないことに対してブノワ、リュドともに状況がにわかには信じられない様子であった。デモ終了後の発言でブノワは、「あと1メートルの表現の自由」を獲得しようと訴えた。路上でデモできる空間の広さは、民主主義の度合いに比例する。今の日本の民主主義は、完全に警察に規制され、統率されてしか許容されない表現の自由しか認められていないと述べる。

デモのあとに新宿の沖縄料理店へ。リュドは「おいしい」と、てびちーを何度もお代わりしていた。DALのメンバーは何を出されても喜んで大量に食べるが、その本領発揮であった。

#### 5. 6月30日 東京、大阪、名古屋でのローカルな運動との出会い

台東区役所で生活保護申請にあたって、職員が侮辱的な態度をとったことに対する抗議行動に参加。またもや遅刻。リュドもブノワも全員参加型、全員合意型の交渉の進め方が印象深かったと述べる。

その後の国際フォーラムではブノワが発言した。実はブノワは反グローバリズム関連の、とくに「マルチチュード系」インテリを心から嫌っている。ジェラルールは、ブノワと並んで発言したモリツィオ・ラッツアラートの議論からは学ぶところが多いという。リュドは「そもそも読んでないで知らない」。

ブノワはプレカリアートの分科会で、知識人がプレカリアートについて大学の中で議論するのではなく、実際の生活のなかにある貧困問題にも取り組むべきことを強調していた。

夜、大阪に移動する。釜ヶ崎のはずれに赤ちょうちんを発見したが、同行してくれる釜パトメンバーが、そういううらぶれた店はいやだというこ

とで、新世界の串揚げの店にいった。朝2時まで飲み続ける。帰りにスーパーマーケット玉出で買い物をする。3人ははじめてみるかずかずの魚の物色に夢中になっていた。そしてリュドとブノワはフランスでは絶対食べることができないからと鯨肉と鯨ベーコンを購入した。ジェラルムはくじらのような知的な哺乳類を食べるのは野蛮な行爲だ、と強硬に反対。釜パトのメンバーは、「というより、この店で生もの買わないほうがいいと思う」という理由で反対。

大阪では釜ヶ崎のフィールドワークをすることになっていた。NoVoxは、世界社会フォーラムや反G8の運動が、欧米ミドルクラス中心で、どこにいても同じ面々が参加していて、場所を変えてもローカルな運動が参加することが少ないことから、ローカルな運動との交流を方針としている。

実際、G8抗議行動に参加するために世界各国を移動する反グローバリズム運動「エリート」層は着実に形成されている。どこにいてもインターネットにつながっており、自国と同じ環境で仕事して情報を発信する。「北」の出身の活動家に限らず、「南」の活動家にも同様にエリート層は存在するし、それが反グローバリズム運動の中心にいる。

そのような運動内のエリート主義の批判は反グローバリズム運動内ですでに起きている。そうであるがゆえに、大阪、名古屋など都市底辺層の運動団体と出会うのが来日の目的のひとつでもあった。

釜ヶ崎フィールドワークには11時に出発の予定だったのに、3人ともいっこうに起きてこない。同行してくれる活動家3人をさんをさんざん待たせた。フィールドワークの途中、西成警察署前を通ったときに、6月の釜ヶ崎の暴動に抗議して逮捕者の解放を求めるファクスを大阪府警に送ったから、その回答を要求しよう、とリュドが提案。30分ぐらい押し問答となった。対応する職員は、大阪府警本部に問い合わせるよにとの一点張り。「西成は一部署にすぎないから、本部に送ったファ

クスについては回答できない。」「西成警察署の対応についての抗議なのだし、同じ組織の一部なのに回答できないというのはおかしくないか。」「本部に問い合わせさせてくれ。」「日本に到着して以来、フランスではありえない公的機関の作業の効率のよさに感銘を受けていたが、警察の対応のダメさはフランス並みでがっかりです」と、リュドが告げて西成署を後にする。

扇町公園で交流会。それからデモへ。デモのあとにふたたび扇町公園で交流会。さらにDさん、Eさんと一緒に新世界の串揚げ屋で朝まで飲んだ。リュドは年齢が近いせいか、Dさんに、学生をやめてこのまま活動家を続けて、仕事のキャリアもない、学歴もない、それで今の運動も続けられない状況になったらどうするか、と話していた。リュドは博士課程1年目で、DALの活動のために学業を放棄しつつあるので、同年代の活動家のライフコースが気になるようであった。

新世界の店を出たのが6時ぐらい。そのまま西成の労働福祉センターへ。すでにその日の求人は終わっており、仕事にあぶれた300人近くが手持ちぶさたにしている。リュドは、「これだけ仕事をしたがっていながら、仕事にありつけない人が、こんなにたくさん集まっているのをみたことがあるか?」とショックを隠せないようだった。

今眠ったら、次の目的地である名古屋に絶対に到着できないことは明らかなので、布団を畳んで、これから札幌まで同行する釜パトメンバーを待つ。そして名古屋へ。難波から乗った名鉄のなかで熟睡。12時にFさんと笹島日雇い労働者組合会館で会う。ささしま食堂で昼食をとり、名城シェルターを見学後、集会。その後コリアン料理屋で鍋を堪能し、いこいの家で眠りについた。

## 6. 7月3日 札幌へ

札幌に向かうべく中部空港へ。電車を降りて空港内に入る通路の入り口で目の前を3人の男性にふさがれる。警察手帳を見せられて、パスポートの提示を求められた。札幌に着いたときも同様。

ゲートをでると数箇所尋問。ようやく宿泊先に到着し、宿の前の赤ちょうちんへ。

翌朝は8時半に宿をでて二条市場へ。Bさんとジェラルムは寝ているので置き去りにする。二条市場の3人分しか席のない寿司屋のカウンターで握りを食べるようになった。これが朝食。ネタの選択に迷っている様子のリュドに、職人さんがぼたんエビとウニをすすめる。「いや、どれを食べるかじゃなくて、どの順に食べるか迷っているんで」とリュド。

それから歩いてメディア・センターへ。ワークショップの会場に向かう途中の狸小路のはずれで「カフェが少ない。日本人はどこでコーヒー飲むんだ」と言い出すので、たまたま目にとまった喫茶店に入る。古い建物の地下に降りていくと、擦り切れたビロードの椅子が並んだクラシック喫茶だった。すばらしい音響でバッハが流れていた。ふたりとも感動して、つい店を出るまでの時間が長引く。分科会の準備で1時間前にいくはずだったのに、到着したら30分前。また遅刻。日本側の分科会の主催者Cは、毎回の遅刻に怒って口もきいてくれない。

ジェラルムが発言者だったが、前置きだけで割り当てられていた10分を使ってしまい、「10分では重要なことなど話せない」と抗議する。時間どおりに効率的に要点を話すのが明らかに彼は苦手なのであった。しかし、官僚的に時間をてきぱきこなす効率性と合理性を求めたら失業者運動は結局、「勝ち組」のほうに自分も行きたい、という主張にしかならない。こういう非合理性、非効率性が「欠点」にならないのが「もうひとつの世界」なのだともいえる。生産性を否定するところからしか、もうひとつの世界は実現できない、という彼の主張はそういうわけで実感がこもっていた。

分科会後デモへ。デモの前の発言で、ブノワは不動産投機をはじめとして、企業活動の自由や自動車の通行の自由を保障するために国家主権が発動されているのだから、市民のデモによる表現の自由を守るためにも、国家の積極的な介入を要請すべきだと発言。この程度の自由しか市民に認め

ない民主主義なんて形骸化している、と。

スーザン・ジョージの発言の第一声は、警備している警察への謝辞であった。意外と気の利いたジョークが言える人なのかと思ったら、警官もワークショップでの議論に参加すれば、市民の主張が分かるであろうといった内容で、謝辞は本気のようにであった。

デモではあと1メートルの表現の自由を訴えて横断幕を広げる。車道側でブノワとリュドが最大限に横断幕を広げようとするが、東京とはくらべものにならない執拗さで警官隊が阻止してくる。3メートル規制をはみでたままブノワが前進することを警察が妨害するため、たびたび隊列が立ち止まり、そのたびにマスコミのカメラと応援の人が押し寄せてくるのでますます進めない。横断幕の幅を狭めるよう求める主催側のスタッフを、ブノワは私服警官だと思いこみ、自分たちの仲間だと気づくまで耳を貸そうとしなかった。

その後プレカリアート映画祭に行き、終わった12時近くに、狸小路をはるかに中心部から離れた場末の寿司屋で夕飯を食べた。すでにご飯が残っておらず、ある限りのご飯をつかった2人分の寿司を4人で食べてビールを10本ほど開けた。

翌7月5日は、前日の集会で、G8の警備でコインロッカーが封鎖されて野宿者が荷物を保管できなくて困っているという話を聞いたばかりだったので、リュドが、バールでコインロッカーをこじあげちゃおうよ、と提案。バールとコインロッカーを探しながら歩いているうちに、デモのときに「あと1メートルの表現の自由を」というプラカードを掲げようという話になって、紙とフェルトペンを探すほうに気をとられて、そのままデモへ。主催者に、昨日のことがあるから、今日は横断幕を広げないように注意を受ける。主催者も在宅起訴になるかもしれないから、といわれた。そこで横断幕を広げずにデモに参加した。

NoVoxは意志決定において、ローカルな運動の意志決定に外部の支援者が介入することはできないという立場を貫いているので、当事者の決定は尊重する。スーザン・ジョージのような「反グ

ローバリズム運動エリート」に、運動のあり方や、まして「もうひとつの世界」がどのようなものであるかを決めてもらう必要はないと繰り返す。

デモで逮捕者がでたという話を聞いて、リュドは、「じゃ警察に抗議に行こう」。Aさんが、いつもならそういう成り行きになるのだが、と様子をみにいこうとしたところで、抗議に行く一群にであって合流した。

警察前で抗議の声をあげて、しかし排除される前に自主解散という打ち合わせがあった。日本の仲間がそうするというなら、尊重する、ということになる。

解散して警察前の通りを渡ったところで、大通公園に戻って今後の対策を立てるという呼びかけがあった。逮捕されたうち1人は名前もわかっていないのに、警察署から500メートルも600メートルも離れたところで、打ち合わせするのはおかしいと思う。と、リュドもブノワもその場所を動こうとしない。夜の11時ぐらいまではこの場で抗議行動したい、と言う。主催者は、しきりに大通り公園への移動を呼びかける。そのうち外国からの参加者を中心とした5～6人のグループがパフォーマンスをはじめ。一列にならんで無言で手で×マークをつくったりしている。口に貼られた白いガムテープには「G8」とかかかれている。マスコミのカメラのフラッシュをあびながら、いろいろなポーズをとってみせる人々。同じく白いG8ガムテープをすすめられるが、リュドたちは、写真映りのいいパフォーマンスのことばかり考えても仕方ない、とつれない。もうビール飲みに行こう、とその場を立ち去ろうとする。Aさんに事情を話すと、いや、実は主催者のほうでも、外国から来た人が警察署前で抗議行動するという提起はもっともだということになり、もう少しそこでがんばってもらいたいということになった、と。そんならこの場でビールを飲もうということになり、コンビニでビールと焼き鳥を買って道に座り込む。そのうち、愛国党が大通り公園でブラック・ブロックと対立しているとかで、警察署前の装甲車も、その場にいた人たちも一挙にいなくなる。警察署

と道をはさんだコンビニ前でNoVoxの3人とAさん、Hさん、Iさん、Bさんと筆者だけが残ってしまった状況。Aさんが、大通り公園で待っている人たちと合流して打ち上げに行くことを提案した。それなら、と、リュドは記念碑を置いていくと言い出す。「人が死んだときなんかのあれ。ビクトル・ユゴーここに死すとか。あれをつくるから」と。厚紙をとりだして、フェルトペンで碑を書きはじめる。「4人の仲間が2008年7月5日警察によって逮捕され、18時45分、友によってここに見捨てられる」。皆、力ない笑い。ガムテープで歩道に「碑」を貼り付け、ビールを飲みすすきの方面へ。チェーン店には絶対入らないといはるブノワとリュドに、Bさんは「すすきのに、チェーン店じゃなくて安くて大勢入れる店なんてないからと通訳して」と怒りを隠そうともしない。理論よりも実践を重んじる運動論からいえば、何を言って書いたかではなく、何をやったかだけが重要であるため、「反グローバリズムといいながら、チェーン店に入るなんてありえない」というふたりは譲らない。「地元のローカルなチェーン店だったらいいかな」というHさんに、「絶対だめ」と答える。

すすきののはずれに見つけたひなびた食堂にやっとな腰を落ち着け、食事のさいちゅうにリュドは、日本の日雇い労働者の運動が、「仕事」がまず第一であるところがフランスとだいぶ違うと感想を述べる。日本には働いてないとダメという「仕事信仰」があるのではと。その上で、仮にそうだとすると、なぜ「まず住宅を」というほうにいかないのかとAさんに質問していた。失業している場合でも住宅があれば、マージナル化される度合いがぜんぜん違うではないかと。路上生活を送ることによるスティグマ化やマージナル化は、失業しても住宅がある場合とは比較にならないぐらい度合いが大きい。だったらまず家をと考えたほうがよいのでは、と。

それに対してAさんは、日本の野宿者の多くが単身の男性であり、「あのビルを建てた」というような具体的な形として残った「仕事」だけが

誇りであるがゆえに、仕事に執着するのだと説明する。あらゆるコミュニティから排除されて、家族生活にも失敗し、自分のアイデンティティの核になるものが仕事だけなのだ。その点、家族というコミュニティのなかにいて、ホームレスになっているDALの家族たちとは異なるのではないかと。ただやっぱり家があったほうが体が楽だということで、生活保護の申請がされるようになってきた、と説明していた。

リュドは「家」があればマージナル化の度合いが小さいという。しかしそれは確かに、Aさんがいうようにコミュニティのなかにいてこそではないか。かつてのじれんのJさんが言っていたように、アパート生活にはいっても、仲間がいる公園に戻ってきてしまう人もいる。アパートに入っても、そこでの生活を維持するために、朝から仕事にいて、帰ってきたら1人で寝るだけの生活に、これが自分が求めていたものなのか、と、公園でのテント生活に戻ってしまう人がいるという事実は、箱としての家だけが問題ではないことを示している。

## 7. 7月6日 オルタナティブ・キャンプ

3人は豊浦のキャンプへ。オルタナティブ・キャンプは、いずれの国で開催されるときも自由価格の食事や自由ラジオでの情報提供など、自主管理、民主主義的運営によるもので、「もうひとつの世界」を实践する場である。また、さまざまな主義主張が共存する場でもある。サミット封鎖に参加する者も、課された制限内でのデモだけに参加する者も、運動を支持はするけれどいずれの行動にも参加せずにキャンプに残る者も、互いの考えと行動のあり方を尊重してきた。

ところが、豊浦に行かずに先に帰った筆者に、7日、ブノワから「ここは強制収容所か」と興奮気味のメールが来た。何事かと気を揉みながら、先に帰国するために8日に羽田に到着したリュドにあったときには、「強制収容所というか、林間学校みたいかんじだった。飯の食い方まで指示さ

れて、あれをやれ、これをやっちゃいけない、と指示してくる。」

その後のブノワのメールでは、「格好ばかりのインテリの集まり。反グローバリズムの運動がまず格好ありきのインテリのスタイルになっている」と容赦ない。

リュドは「ま、それはそれでいいんじゃない。で、いまからどうすんの」ということになり、山谷でビールを一杯飲んで解散した。

## 8. 7月19日 解散

ブノワとジェラルムが20日に帰国するため、渋谷で宮下公園と美竹公園でのじれんと交流した。その後、G8を問う連絡会の貧困・労働WGとの交流会を渋谷の焼鳥屋で行った。意見の交換で最初に発言したKさんは、洞爺湖サミットに反対する運動について、日本の野宿者運動のアート部門を担当してきた。自分は「活動家」ではないと前置きして、Kさんは、自分としてはG8のどこがいけないのか、新自由主義とは何であるかを「普通の人」に聞かれたときに説明できない。反G8の運動は「活動家の祭典」という印象を受けた、と発言。Kさん自身は札幌にもオルタナティブ・キャンプにも参加していない。それに対してジェラルムが、「来ない人にどうやって説明できるんだ」と気色ばむ。

ジェラルムによれば、キャンプで炊事を担当していたという山谷から来た活動家が「声なき者」のまま、実際に討論に加わらなかったと。声なき者が、声なき者のままとどまってよいのか、と。それに対して、Aさんは、「共同炊事」という共同性が追及された実践であり、それが炊事に参加しなかった者には理解されなかったことを問題として指摘していた。

ブノワは、洞爺湖は、ロストック<sup>(11)</sup>をそのまま日本でも再現する試み（オルタナティブ・キャンプの組織など）だったと指摘する。「インテリがマニュアル本どおりにロストックを再現しようとしたかのように思える」と。しかし、彼によれば、



21,000人の警察に対して500人のキャンプ参加者しかおらず、その上キャンプは3カ所に分散していて、警備あてられた予算はロストックの2倍。こうした状況下でマニュアル的にロストックを再現しようとするオーガナイザーの運動のつくりかたには賛同しかねると述べた。

貧困運動において、反G8は「インテリ」の運動であり、現場と乖離しているという意味では、日本もフランスもそれほど事情は変わらない。ブノワは、インテリが「ディスクール」だけで何もしない運動であるのに対抗するのが、持たざる者の運動だといい、Aさんは、それが日本では共同炊事という実践によりオルタナティブを示すという取り組みだったと説明する。しかし、ブノワは、やはり議論に参加して貧困の当事者が「ディスクール」をインテリから奪回することでオルタナティブを当事者から発言する必要があるのでは、という意見であった。

グレーバーが指摘するように、60年代の運動がマルクス主義で理論武装したのに対し、反グローバリズム運動は、理論よりは実践に向かう傾向がある (Graeber, 2004, 5-6)。とはいえ、Aさんがふりかえるように、オルタナティブ・キャンプでは、方法論をめぐって議論する「インテリ」は、炊事班の共同炊事をたんなるご飯係としてしか認知していなかったことも確かである。

反グローバリズム運動における直接民主主義とは、意志決定において、対立する意見を持つ相手を説得して意見を変えさせるものではない (Graeber, 2004, 8)。合意に至ることが望めないからといって、形勢が不利な相手があきらめて議論から撤退すればよいというものでもない。しかし今のところは運動内部において少数者を排除しない意志決定の方法は、きわめて少数のアフィニティ・グループにおいてしか機能していないばかりか、運動がさらに細分化するおそれもある。

反グローバリズム運動はシアトルから10年を経た現在、ひとつの運動のジャンルとして定着し、それは運動の 이슈 だけでなく、運動の組織のされかたにおいても、新しいジャンルを生み出

しているが、いまだ方向性は定まっておらず、民主主義のあり方を考える上で重要な題材であり続けている。

## 注

- (1) 2008年以降は隔年開催となった。開催されない年には、各地で社会フォーラムが行われている。
- (2) 洞爺湖サミットをめぐる市民運動はおもに、(1) G8を問う連絡会+オルタナティブ・キャンプ、(2) G8サミット NGO フォーラム、(3) G8サミット市民フォーラム北海道、(4) G8サミット女性の人権フォーラム、(5) サミット人権監視弁護士ネットワーク (WATCH)、(6) 先住民族サミットアイヌモシリなどがあり、7月6日のデモをのぞいて、それぞれ個別に活動した。(1) はいわゆる「ブラック・ブロック」(サミット封鎖)を含み、サミットの正統性を認めない立場をとる。したがって政府との対話もありえない。(2) は国連の NGO フォーラム方式で、最後に採択される宣言に NGO の提言を盛り込ませようとするものである。したがってサミットの正統性そのものを問うものではない。「抵抗」、「対抗」、「反対」、「抗議」という言葉は使われていない。(3) はサミットに賛成でも反対でもない。(5) はリーガル・チームである。
- (3) 筆者は都市底辺層の社会運動を研究テーマとして1995年からパリで住宅への権利運動に対する社会調査を行っており、洞爺湖サミット抗議運動では、「持たざる者の運動」に同行しインタビューおよび参与観察を行った。
- (4) 反グローバリズム運動の特徴として、「多様性」や「直接民主主義」のほかに、「権力奪取を目指さない」(Holloway, 2002)、「オートノミーであること」、「自発的アソシエーションであること」、「相互扶助的であること」、「構造的な暴力、不平等、支配・被支配の関係をなくすこと」(Graeber, 2002 ; 2004)が見られる。これらはグレーバー (Graeber, 2002) が「新しいアナーキスト」として議論しているように、アナーキスト的な特徴とされることもあるが、そうしたカテゴリー化をす

ることで、1990年代以降の社会変動に対応して現れた社会運動の特徴を単純化してしまうおそれがある。アナーキストやリバタリアンとして自己規定する活動家も「持たざる者」の運動には多数いるが、そのように自己規定しない人も上述の特徴を一定程度共有しているため、ここでは政治的志向から議論することはしない。

- (5) 日雇い労働者の労組、野宿者運動、フリーター労組、生存と自由のメーデー実行委員会、全日建運輸連帯関西生コンなどが参加している。
- (6) 公共空間や社会運動内部の権力関係を問題にする必要性は、ジェンダー研究が指摘してきた (Macdonald, 2005)。ジェンダー関係にとどまらず、階級関係や南北問題に生じる権力関係にも適用して議論されるようになってきた (Guidry et al., 2000)。
- (7) リュドとブノワはミドルクラスである。NoVoxを構成するローカルな運動は貧困の当事者を担い手としているが、G8抗議行動のような国際フォーラムに参加するのはミドルクラスのメンバーになりがちだが、貧困の当事者運動を支援するだけではなく、ミドルクラスが貧困の当事者の側に立たなければ問題は解決しないという立場をとっており、その点では矛盾しない。
- (8) 研修中で賃金は専従の3分の1で400ユーロ。
- (9) 「市民を支援するために金融取引への課税を求めるアソシエーション」。市場経済至上主義の新自由主義的なグローバル化に反対する市民団体で、フランスで1998年に創設され、ヨーロッパ各国に広がった。日本でも2001年に結成されている。
- (10) 「ジョルジュ」はジョージのフランス語読みで、ジョルジュ・サンクはパリの最高級ホテルと店が軒を並べたシャンゼリゼ通りに面した地区。
- (11) 北ドイツのロストックには、2007年のハイリゲンダム・サミットに対する抗議行動とオルタナティブが設置された。

———, 2004, *Fragments of an Anarchist Anthropology*, Prickly Paradigm Press.

Guidry, John A., Michael D, Kennedy, and Mayer N. Zald, 2000, "Globalizations and Social Movement" in Guidry, John A., Michael D, Kennedy, and Mayer N. Zald eds., *Globalization and Social Movements : Culture, Power, and the Transnational Public Sphere*, University of Michigan Press.

Holloway, John, 2002, *Change the World Without Taking Power: The Meaning of Revolution Today*, Pluto.

Macdonald, Laura., 2005, "Gendering Transnational Social Movement Analysis: Women's Groups Contest Free Trade in the Americas", in *Coalitions Across Borders: Transnational Protest and the Neoliberal Order*, Rowman & Littlefield, pp.21-41.

Santos, Boaventura de Sousa, 2004 "World Social Forum: Toward a Counter-Hegemonic Globalization, Part II," in Jai Sen et al. eds., *World Social Forum: Challenging Empires*, Viveka.

Sen, Jai, 2004, "The Long March to Another World: Reflections the World Social Forum Process in India and Internationally," in Jai Sen et al. eds., *World Social Forum: Challenging Empires*, Viveka.

Waterman, Peter, 2004, "The Secret of Fire," in Jai Sen et al. eds., *World Social Forum: Challenging Empires*, Viveka.

(付記) 本稿のもとになった調査は科学研究費によって行われている。

## 文献

Graeber, David, 2002, "The New Anarchists", *New Left Review*, 13 Jan-Feb, pp.61-73.